

初めて「エッセイ」を書かせていただくことになり、とても楽しみな気持ちでいます。二〇二三年、自分の中で最も大きな出来事だったのは、引っ越しをしたことです。

わたしは、大阪生まれ大阪育ち、職場も大阪で、つまり大阪から出て暮らしたことがありません。ただ、生まれ育ちは北摂の方なので、職場近くの都市部に引っ越したいと考えてきました。そして、ようやく昔から憧れていたエリアに住まいを決めることができました。いいなあ、素敵だなあ、と前から思い、でも高いよなあ、どうかなあ、とずっと悩んでいました。でも、これは、わたしの、わたしによる、わたしのための人生、なのだから、いいのではないかと。とようやく思えるようになったわけです。

当たり前すぎて、言葉にすることも憚られるのですが……決して安くはない家賃を払い、光熱費を払い、税金を納め、世の中のあらゆる善意や悪意と向き合い、対峙し、たまに逃げたり隠れたりしながら日々を暮らしている自分を、わたしは自分で褒めてやりたいのです。ああ、それでいうと【不動産屋巡り及び内見、賃貸契約を含む引っ越しに伴う転入転出届及びインフラストラクチャー契約等全般、引っ越し当日の手続きや立ち会いや荷物の梱包開梱等全て】のめんどろくささたるや！仕事をしながら、これをちゃんとこなした自分は本当にすごい。もう一生やりたくない、二度とやりたくない、と引っ越し度に打ちひしがれます。だからわたしは、自分一人だけでそれらの煩雑な手続きをやったことのない人よりも自分の方が「偉業を成したことがある」と優越感を持っています。どれだけ立派なことを言っていようが、素晴らしい肩書きや資産を持っていようが「でも、アレ、やったことないんでしょ？」などと内心思ってしまうのです。そのくらいにアレは大変だと思います。

【ツガイ】であるパートナーを持たず、子孫を残すための子どもを持たないわたしは、某政治家の言葉を借りれば“生産性のない人間”なのでしょう。快樂目的ではなく生物学的な意味で生殖行為をし、繁殖するための生物としてのみ生きている、ことを【普通の人間】と定義するのならばそれはきっと正しいので、反論しようとも思いません。でもわたしは【生物としてのみの人間】ではありません。文化を楽しみ、芸術や学問に触れる。そうい

うことをするために生きています。感情を持ち、美しいものに触れ、見聞きし、笑い、労働をし、思考したり怠けたり、抗えない権力に挫けたりしながらも、こうして生きています。

【ツガイである異性のパートナーを持ち、生殖行為を行い、子孫を繁栄させゆく人】と【そうではない人】のみが相反する属性ではないとも考えます。生きとし生ける人びと、それぞれの人の数だけ、生き方も考え方も捉え方もあるのだと思うのです。性自認も、性的指向も、パートナーについてのあり方も、子どもについての考え方も。【当たり前】や【普通】など、ほんとうは存在しないのです。でも、日本古来の家父長制度は根強く残り、何か発言すればフェミニズムだと揶揄されてしまう現実があります。ホモソーシャル内で強くあることこそ是である、と強いられていることを苦しく思い、けれどそれを発信できない男性だっているでしょう。時代はどんどんうつり、流れゆきます。どうして対立したり、煽りあったりするのでしょうか。遠くの大きな悲しみに関心を持つことは当然大切なことです。だけど、まずは近くににいる人、隣にいる人、声を届けられる人、そして自分自身を、大切にしなければませんか。そして、こんなふうに考えているわたしも、大多数の【会社組織】という中にいるときはそんな自分を殺し、マジヨリテイに迎合して生きています。殺し、ではなく、そんな思いを持っている自分を「逃がしてあげている」のかもしれない。だって、わたしたちはやっぱり生きないといけないから。生きるために自分を殺すのではなく、生きるために擬態し、迎合し、逃がしてあげるのはです。

だからわたしは、わたしだけではなく、あなたの思う【普通】や【当たり前】をいつだって褒めたいと考えています。【大人だから】【母親だから】【男だから】【学生だから】と、あなたが当たり前に空気を読んで、迎合して、「ほんとうの自分」を「逃がしてあげてまで」も、求められた属性の、求められたロールモデルをこなすあなたは、マジヨリテイに馴染もうと努力していることは、ものすごく大変で、力が必要で、疲れることなのだと。あなたの積み重なった時間や思考や感情や努力の上に成り立った、とても素晴らしいことなのだと伝えて、褒め称えたいのです。

わたしは、自分の好きなエリアに、自分が最高にかっこいい家だ、と思える家に、引越してくることができた自分を心の底からすごいと思っています。愛おしく思います。言

いたいことがあったけれど、言えなかった、言わなかった。理不尽だと思った、馬鹿にされたような気がした。孤独だと思った。寄り添ってくれる人のことさえもうとうしく思う自分に嫌気がさした。そんなときわたしは、窓を見ます。なるべく夜の方がいい。電車やバスやタクシー、車窓が切り取る夜の街は、とても綺麗で、そして正しくて、素直な気がするから。嘘まみれの都会の夜の、人工的な灯りも、煩雑な音も、猥雑なひとびとも、
においも、全部まとめて【生活】だと思うから。

ある朝、東京出張へ行く朝です。準備万端で、新幹線もホテルも予約済みなのに、わたしはベッドから一步も出られなくなりました。使い古してぼろぼろのスーツケースが足元にある、這ってでも行こうと思いましたが。でも行けなかった。よく考えてみれば、お風呂にもまともに入れていなかった。電源を入れて洗濯終了のブザーが鳴っては干せず、また洗い、また干せず、何度もそれを繰り返して干せないままの洗濯物がもうずっと前から洗濯機の中にあった。そこからなんとか誤魔化そうと生活してみたけれど、あつという間にダメになりました。死にたいくらい情けなく、悔しかった。現在わたしは、休職をしています。別にこんなことは全く書く必要はなかったし、書く予定もなかった。でも、主治医の先生が「苦しい人はたくさんいる、だからあなたがそれを言葉にしてください。だから書くわける人がいるかもしれないね」と年内最後の診察で言うていただきました。だから書くことにしたのです。主治医の先生は「ちゃんと本屋さんで買いましたよ」と言って文學界を読んでくださいました。感想についてはあれこれ言うこともなく「とつても、あなたらしいと思った」とひとこと言うてくれました。そして「忙しくて本なんて久しく読めていなかったけれど、また物語が読みたい気持ちになった、あなたのおかげだね」とマスクの下で、小さく微笑んでくれました。わたしはだから、今の自分を、もっと頑張れたはずだったのに、ダメになってしまったみっともなく情けない自分を、今できる自分の言葉で綴ろうと思えたのです。自分くらいは自分を愛おしいと思っただけだった。

ひとりで寝起きし、ひとりで暮らす。ひとりで食事をし、ひとりで夜を見る。この夜の中に、味方は一人もいないかもしれない。だけでもしかしたら、いるかもしれない。この夜の中は、敵ばかりかもしれない。だけでもしかしたら、思うほど敵は多くはないかもしれない。隣の誰かの、さみしさも幸福も、わたしは知る術がないし、別に知る必要性もないのだ。だって、車窓の夜はわたしだけのものなのだから。

誰に与えられるでもなく、誰に奪われるでもない。わたしが、わたしのために手に入れた、わたしだけのものなのだ。大切にしよう、と思います。同じように、ひとりぼっちで車窓の夜を見つめるどこかのあなたにもそれが届けばもっといいのだけれど。音楽や文学や芸術は、そういうことを伝えるために、わたしたちに、人間に、与えられた大切な手段なのだと思います。生物としてのみ生きるのではなく。だからわたしは、ずっとそういうことを言っていきたい。伝えていきたい。誰に届かなくとも、揶揄されようとも。わたしはわたしの窓を大切に。あなたも、あなただけの窓を大切に生きて欲しい。車窓の夜は なただけのもの。車窓の夜は わたしだけのもの。